

# 親和会会報

白坊隆書

22号  
2009.5



総会報告

平成19年度会計報告

第157回親和会が、2008年11月22日、京王プラザホテルで行われました。

参加者は、150名と盛況でした。加治久継会長は、冒頭のあいさつで、親和会の現状について説明され、今後の発展のための会員の強い支援を要請されました。小宮山宏総長にも、お忙しいところを出席していただき、励ましのあいさつをいただきました。

「あった」というメッセージを後からいただきました。

本年度の幹事は、昭和58年学部卒（大久保達也氏、加中桂一氏、久保雅敬氏、加藤隆史）と平成5年学部卒（内田啓氏、神子島博隆氏、関根泰氏、武田直也氏）でした。が、実際の細かいことは親和会事務局がほとんどやってくさいました。

親和会後、工業化学科・合成化学科（工化合成）と反応

## 第157回親和会を終えて

第157回親和会運営幹事代表  
化学生命工学専攻教授

加藤隆史（昭和58年卒）

アトラクションとして、現在の化学・生命系の活気あふれる現状を、橋本和仁教授（応用化学）・山下晃一教授（化学システム工学）・野崎京子教授（化学生命工学）から、お話しいただきました。また、最近の東大キャンパスについて写真を用いながら大久保達也教授から説明いただきました。

親和会は気さくな雰囲気ですので、ぜひ一度参加されることをお勧めします。15年上の先輩に親和会のことをお話ししたところ、面白そうだというので出席され、「いろいろな出会いがあって面白

約25年ぶりの再会でしたが、大変盛り上がりしました。化学工学科では同期会が毎年あるのですが、

実は、工化合成の昭和58年卒は、卒業後、一度も同期会を行っておりませんでした。しかし、今回30名程度も集まり、会長より「これだけの人数が集まった秘訣を知りたい」とお褒めの言葉をいただきました。人恋しくなる年になったのでしょうか。同期会を熱心に行っていない学年の方は、何かの機会を見つけて、ぜひやってみていただければと思います。



乾杯の音頭を取られる  
下川洋一顧問

## 第158回 親和会のお知らせ!

日 時：平成21年10月17日(土)  
16:00~18:00  
場 所：東京大学 山上会館  
1階 ラウンジ  
企 画：現在企画中  
運営幹事：昭和59年卒・平成6年卒

ご予約おき下さいますよう  
お願い致します。

収入の部

平成18年度繰越金	6,436,012
年会費	101,540
利息	6,502
合 計	6,544,054

支出の部

会報印刷費	476,072
通信費	763,275
親和会組織化費	32,000
第155回親和会補填費	61,105
大学院親和会支援費	96,515
事務局運営費	1,425,325
合 計	2,854,292

繰越金

3,689,762

# 親和会講演会報告 ドクター問題

工学系研究科の博士課程へ進む日本人学生が減っています。技術立国の日本にとって由々しき事態であると思います。

専攻によって大きく差があり、幸いに化学・生命系はまだそれほど深刻な状態にはありませんが、工学系全体では、約400人の募集（実際の収容可能数は現在はこれより更に多数です）に対して、日本人合格者は平成19年度 186人、20年度 166人、21年度はいくらか改善が見られましたが、それでも202人でした。これは博士課程を修了して学位を得ても、定員削減の影響もあって大学の教員への就職が難しい状況にあること、そして一方で、企業に就職するのなら苦労して博士の学位を得る必要はないし、むしろ修士修了時に入社する方が有利であると思生達が考えていることが大きな理由と思われる。実際、20年度の数字について言いますと、工学部卒業生の約90%が修士課程に進学するのに対し、修士修了者のうち博士課程に進学する割合はわずかに16%です。

そこで親和会では、この問題の解決に向けてまず最初に、会社側では博士修了の学生に対してどのように考えておられるのかを学生達に率直にお話したい。ということで、昨年暮れの12月6日に5号館52講義室で講演会を開催致しました。講師は

昭和35年応用化学卒で、本会の理事を長くお引き受けいただいた瀬田重敏氏にお願いを致しました。瀬田氏は、旭化成（株）で専務取締役をお務めになった後、現在は東京農工大大学院客員教授に就任しております。

## 講演会の開催

講演会は土曜日にもかかわらず50人を超す学生の出席があり、この問題に対する関心の高さを伺わせました。

講演は「化学出身の産業人は今後どうありたいか」という題で、「君たちが企業に入ったなら何が求められるか」と、「博士課程進学のお薦め」の二部構成で進められ、前半では企業人に求められるものを、基礎的知識、科学的思考法、法令知識、教養、哲学と様々な面から取り上げて話されました。後半はドクター問題について産業人の経験を踏まえた視点から説得性に富んだ話をされ、「時代は大きく変わった、今や企業は博士に大きな期待を寄せている」と、博士課程への進学を強く薦められました。

講演後には、出席者との間で活発な質疑応答が行われましたが、それでは足りず、一部の学生には後日改めて瀬田氏との懇談の機会を設定することとなりました。また、この講演の要旨を是非研究室の学生に配りたいと申し出て下さった教員もあり、まずは成功のうちに本講演会を終了することができました。以下に、瀬田氏のご講演につきまして、博士への

進学に関わる部分についてその内容をご紹介いたします。

## 博士課程進学のお薦め

ドクター問題について、瀬田氏は「化学の分野でも今までは企業の中の博士は評価されなかった面もあったが、しかし時代は既に大きく変わりつつある、企業は「博士」に期待するようになってきている」として、以下のように話されました。

確かに日本では企業に学位は不要、という土壌があった。1950年代から10〜20年の間は欧米からの工業技術導入期で、この時代は百戦錬磨の技術者が活躍した時代である。その技術者の中では、企業人の育成にはOJTを通じての技術伝承にしくはないとの思いがあり、こうした時代にあつては修士や学士で充分だった。

しかし、時代は大きく変わった。既に、80年代の初めに「技術導入時期が終り」、「お手本のない時代、自社技術がなければ生きていけない時代」の到来が言われていたが、21世紀の今、その状況は一層鮮明になってきた。こうした中で企業は、「ゼロから問題提起できる人」、「Innovationの担い手」として博士に期待するようになり、「科学的思考法」を身につけた人々で研究職を固めるという考えが企業で高まってきた。そして、時代は更に進み、「博士でも不利にならない時



# 親和会 ホームページ リニューアル!

未だ一部の内容の掲載です。これから少しずつ充実させていきますので是非、ご覧下さい。

また、これまでのHPアドレスから下記のアドレスに変わりました。

<http://www.chem.t.u-tokyo.ac.jp/shinna/>

代」からいずれ、「博士が主導する時代」になるだろう。企業の経営層も半分以上がドクターで占められる日が来るかも知れない。

では、博士号の取得にはどんな意味があるのだろうか。例えば、企業に入ると外国人と付き合おうチャンスが多いが、外国では研究開発のみならず、ビジネスや生産技術に関わる人々も多くは学位保持者で、そういう人々と対等に渡り合うためにはこちらも学位をもっている必要がある。

このように瀬田氏は様々なメリットを挙げながら、その中で最も大切な点は、博士論文研究を行うことで正しい「科学的思考法」を身につけることができる事

だと語られました。

しかし、瀬田氏は「博士なら何でも有利」の時代は来ないとして、博士が期待に応える為の条件を二つ挙げられました。

第一は博士号を取る大学での「研究室の選択」である。科学的思考法をきちんと教育してくれる研究室を選択しなければならぬ。換言すれば、大学のあり方にも反省・改善の余地があるのである。教育の本質をはずした研究室は自然に淘汰されるだろう。

第二は博士自身の問題である。企業は「安寧の場」でも「入れば天国」でもない。企業は時代と共に大きく変わっていく。変わっていくかなければ生き残れないのだ。博士課程の専門に固執してはいるこの変化について行けないのは言うまでもない。大切なのは専門性ではなくて科学的思考法である。博士の皆さんが率先して企業を変えていくイノベーターにならなければならない。それには企業に入った後も不断の向学心と挑戦の心が欠かせないのである。

最後に瀬田氏は「博士課程進学を大いにお薦めしたい。そして、博士課程は自分を磨く場と心得て、科学者、技術者としての心を磨き、皆さんの手で東大の博士課程の質を高く維持してほしい」と強く訴えて講演を終えられました。



加治会長と大学院スポーツ大会入賞研究室の皆さん



御園生誠顧問に閉会の御挨拶をお願いしました



今回幹事の皆様、お疲れさまでした!

## 惜別の春

中尾 真一教授	定年退職	工学院大学教授
平尾 公彦教授	定年退職	
入江 寛准教授		山梨大学クリーンエネルギー研究センター教授
河野 正規准教授		Pohang University of Science and Technology
金原 数准教授		東北大学
常田 貴夫准教授		多元物質科学研究所教授
新海 政重講師		理化学研究所
塚原 剛彦助教		東京工業大学
中谷 準助教		原子炉工学研究所助教
八木 清助教		都市工学専攻に配置換
		山梨大学燃料電池ナノ材料研究センター特任講師
今井ミエ子図書職員	定年退職	再雇用駒場図書館
伊藤 葵技術職員	再雇用終了	安全衛生管理室

# 温故知新

## 出雲旅行

久米 均 (平成9年退官)



「5部の会」という女性の会がある。これは学術会議18期の第5部(工学系の会員で構成さ

れる部)の会員の奥様方によって作られた会である。第20期の学術会議の改組で第5部は消滅したが、「5部の会」は健在で今も幹事が立てたプランによる旅行を毎年続けている。ご主人も参加してよいことになっている。毎年非常に充実した内容の旅行が企画されるので、ご主人方の参加もかなりのもので、忙しい人が多いにもかかわらずよく集まる。

昨年(2008年11月)の旅行は出雲であった。日本の神話では神々が活躍する舞台が出雲である場合が極めて多い。子供の時に絵本で読んで、またほのかに記憶に残っている、因幡の白兔、八岐大蛇退治、国引き神話などはいずれも出雲の話である。日本は天孫降臨により日向から来た神武天皇がいまの奈良地方を抑えて統一されたとされているが、何故神話は出雲なのか、

また出雲大社という日本有数の立派な神社が出雲に建てられたのは何故か。この旅行でこの疑問が多少解消されるのではないかと期待して出かけた。

出雲に関してはこれまでにいろいろな説が提出されている。出雲神話はそれ以前の支配者として大國主命(オオクニヌシノミコト)を想定しこれを服属させることによつて天孫民族の權威を示そうという、政治的意図によつて作られた架空の説話であるとするのがその一つである。一方、天孫降臨以前に出雲に巨大な王朝があったが、これより武力で優れる天孫民族がやつてきて、この国を篡奪したとする説もある。しかし、これを徴証する史料がなにもなかったため、神話の域にとどまっていたようである。

昭和59年7月、出雲斐川町の荒神谷の丘陵から358本の銅剣が発見された。それまでの日本全国での出土数が約300本であるからそれを上回る数の銅剣が一箇所から掘り出されたのである。翌年、前年の銅剣出土地から7メートル離れた所で、銅矛16本、銅鐸6口が発見された。この遺物の種類と数からみて出雲には神話を生み出した王朝が存在したとするのが有力になったと思われるのであるが、それではどのような王朝であったのか、当時としては貴重な物品が何故このように無造作に一箇所にまとめられたのか、出雲に関する筆者の疑問はますます深まる。

古代出雲について不明な点が多いのは、当時のことを記録した文書が限られている

ことである。司馬遼太郎氏によると出雲には、語り部が存在し、驚くべきことであるが、それが現在まで続いているという(「司馬遼太郎が考えたこと1」新潮文庫)。この口伝の開示があれば、日本の古代史も大きく書き換えられるのではないだろうか。

筆者は考古学は門外漢であるが、新しい事実(遺跡・遺物・史料)が発見されるとこれでこれまでの学説が書き改められるところは自然科学と変わらない。むしろその変革は自然科学のそれよりも激しいことが少なくない。上述の遺物の出土を契機として出雲の歴史の再構成を行う「出雲学」が始まっている。初日の夕食前の1時間、ホテルの会議室で、荒神谷博物館の藤岡大拙館長から出雲に関する御講話を頂いた。また翌日の現場見学では博物館の学芸員が遺物発見の経緯を熱く語ってくれた。今後日本の古代史に出雲がどう結び付いているのか、筆者にとつては当初の問題が未解決であるばかりでなく、新しい問題認識の旅であった。これも「温故知新」の一つであらうか。

## 編集後記

今回は会報に同封して親和会についてのアンケートをお送りいたしました。郵便料金会員負担での返送またはメールに回答を打ち込んで事務局に送信と、会員の方々にはかなり不親切なアンケートですが、是非お返事をお送り下さいますようお願いいたします。回答の内容もさることながら、どのくらいの割合で回答が来るかに事務局では注目しています。

現在の「新生」親和会が立ち上がったのは一九九八年四月、それから十一年が経ちました。五号館の1階にスペースを頂戴し親和会室を持りましたのも、その間の真摯な活動を評価していただけた結果と思っております。その親和会がこれからのように活動していくのか。現状維持で良いのか、それともさらに財政基盤を整えて、活動を拡大していくのか。会員の皆様のご意見をうかがいながら、進めていきたいと思えます。

会報内にもご案内しておりますとおり、この度、親和会ホームページを一新いたしました。まだ入れ物が出来ただけという状態ですが、これから約二ヶ月毎に内容を追加・更新して、徐々に充実させていく予定です。少しでも親和会を身近に感じていただけるようになればと思います。

(記/溝部)

## 事務局のご案内

〒113-8656  
東京都文京区本郷7-3-1  
東京大学工学部5号館内  
TEL/FAX: 03-5841-7400  
E-Mail: shinna@chem.t.u-tokyo.ac.jp

事務担当者 近藤 檀(月~土)